

Title	夢の図書館:図書館の味
Author(s)	
Citation	静脩 (1965), 1(3): 4-5
Issue Date	1965-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/36233
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

初ゆめ 2 若井 勲 夫

私は、いつか夢の中に入っていた。

新しくできた教養部図書館が立っている。まず、調べものをするため、目的の本を幾冊か借り、個室の学習室に向う。ここは、周囲の騒音から閉ざされ、静かに勉強できる。自分の部屋のように感じられる。辞典を見たいときは、資料室に行けばよい。そこには、年鑑や新聞の縮刷版なども備えられている。

閲覧室に行く。ここは、ただの自習室、あるいは談話室などになり下っているような現状とは違って、本来の面目たる本を読む部屋である。椅子はソファである。採光はは十分、暖房もきいている。お茶の用意まであり、机には花が飾ってある。部屋の中は静かで、楽しい雰囲気の流れている。本はすべて開架式である。室に入るときは、必要なもの以外の持物は、ロッカーに収めることになっている。目録室も部屋として独立している。ここには本は、書庫に安全に保管されている。貸出は、館内では5冊、館外では2冊。休暇中は5冊まで借りられ、この点大変便利である。また、事務員の休憩時間も、11時半から12時半までになり、昼の休憩時間に利用したいことの多いわれわれには都合がよい。それに、事務員は、図書館業務によく通じ、レファレンス・サービスも行きとどき、親切である。

隣りは自習室である。ここは、図書館の本と関係なく自分の勉強をするところである。自習室は本来の図書館の任務ではないのかも知れないが、この部屋は広く、机ごとに蛍光灯が備えつけてある。

次の部屋は、談話室である。学生会館もなく、憩う場もなく、緑も少ないこの学校にとっては、格好のものである。ステレオまで置いてあるのには驚いた。連日満員の状態である。

なかに、会議室や小講堂もある。本当

に、学生のための図書館ができた。これで教養部生も大分救われることであろうと考えながら外に出た。まま子扱いにされてきた教養部の未来も明るい、と思ったところで夢からさめた。私は、すぐさま、よき時代の、よき三高生の愛した今の図書室を思いやるのであった。(文学部2回生)

図書館の味 坂本 正子

大学へ入って以来、今まで、1日中図書館にいた日が幾日あったろう。1回生の春休の時だった。2月の末から3月20日頃まで、毎日開室9時から夕方5時まで“図書館の人”となったことがあった。

“図書館の人”はそれ程多くはなかった。しかし試験期のあの雑然とした部屋の状況とは少しく趣を異にしていた。誰も静かであった。ジッと視線を前にすえて何かを思いをめぐらしている人を何度も見た。このただ広い、しきりのない部屋の中で、目に見えぬ壁を作って個室に1人、懸命に学習している人達はその半数であった。私にはその情景を見るだけでも図書館通いが楽しく有意義だった。1日の学習を終えて帰る道は、さすがに心が清々しい。1日の学習が更半紙の中に蓄積される。それが何ともいえず心を満たしてくれたのだ。

人類の起源、生命の起源、さらにさかのぼって地球の起源、宇宙の起源等、起源の問題を頭だけで、しかもありったけの力を出して考えた。3月20日になると更半紙が60枚たまった。その中にあの時の私の全てが秘められている。学校にあって、勉強したり、合唱をやったりしながら、時々暇な時に引っぱり出してみるこのノートを眺めながらそう思うのだ。

それ以来私は図書館の味を覚えた。

時折、府立資料館へ行ってみると、この本部図書館に比べて、格段の設備の良さ。全館暖房、室温16度、素晴らしい明るさ。そのひとつひとつに何か面喰う思いがする。でもやはり“図書館の味”があった。

話は違うが合唱をする中に、合唱の味、すなわちハーモニーの美しさや、共に歌う仲間が心が解されていくだろう。図書館にあって同様だ。学習の内容は違っても個々人の自学自習の場である。真剣に仕事に取りくむ場である。そしてその中から“図書館の味”が解されていくのだから。とは言え、この味をかみしめるべき大前提を知らぬ者、忘れてる者が多いようだ。“図書館の味”を作り出すのはそこに会ったものの役目である。話は慎しむべし。鼻をならすのも慎しむべし。歯をぎしぎしされたらたまらない。図書館へ来て最も嫌なものは“図書館の味”をかみしめよ

うとしない人だ。

この「静脩」の前号で図書館に入って左に掲げてある「雲」の事が書いてあったが、この「雲」はいつまでたってもうすよごれた「雲」である。「すぐれた美のかたちを秘めながら静かにほんとに静かに流れている。」図書館の雲は、雲自身の涙でほこりを洗い落さねば、本来の姿に返ることができないのか。

こんなところにも、私たちのまわりの何か殺伐とした感じが象徴されているように思われる。せめて図書館からでもそうした感じは拭い去っていききたいものだ。

(理学部2回生)

資料紹介

○ 日本資料協会編 **日本年鑑類総目録** 昭和39年3月末現在 昭和39 236P 清和堂刊

さきに刊行された「戦後日本年鑑類総目録」に600余点を追加、総計2,800点の年鑑類を収録する。年鑑と題するものとともに、年刊の官公庁・会社・研究機関の要覧、統計、調査報告を主とし、若干の人名録、図書目録を含んでいる。学術研究報告についても誌名に年報と題したものを収録している。これらを主題別に分類排列し、巻末に書名索引、発行所名簿を附しているが、従来このような年鑑類の目録が見られなかっただけに貴重である。

○ 清和堂編集部編 **戦後日本雑誌総覧** 社会科学の部 1963年3月末現在 昭和38 161P

昭和21年以後昭和38年3月末までにわが国で刊行された社会科学関係の雑誌1,000点の要覧である。戦後逐年増加する雑誌のおびただしい発行、改廃に備えて、出版事項を端的に知り、調査研究者に便ならしめんと意図のもとに編集されたもので、誌名の五十音順排列。編者、発行所、創刊年月及び最近の巻号とその価格が記載されており、また巻末に編者・発行所の所在地が附されているから、発注またはバックナンバーの入手にも便利であろう。

○ 慶応義塾大学ス道文庫編 ^{江戸時代}**書林出版書籍目録集成** 巻1～3、索引 昭和37～39

4冊 井上書房刊

本書はその名の示す如く江戸時代に江戸・京都・大阪の書肆が刊行した当時の出版目録の集大成であって、かねてより慶応大学図書館に江戸時代の書籍目録のコレクションとして収集されていたものを写真版とし、それに解説を附したものである。これらの目録は現今の出版年鑑に相当するものであり、現在判明しているものは23種、寛文より享和に至る間に刊行されている。そのうち14種は全巻を本書に収載し、残りは増修版であるから増修の箇所のみ掲げてある。本書によって江戸時代の板行情況を具さに知る事ができると共に、書誌学上にも活用範囲が広いと思われる。

○ 大阪図書出版業組合編 ^{享保以後}**大阪出版書籍目録** 昭和39 459P 清和堂刊

この本は昭和11年、大阪図書出版業組合事務所に保存されていた記録「開板御願書控」(享保9年2月～明治6年12月)34冊を本体とし、大阪書籍商仲間沿革略・書名及著者索引・絶板書目を附して刊行したものの復刻版である。願書であるから、ここに記載のものがすべてが許可されて開板されたものとはいえないが、大阪において出版された図書のみが年代順にまとめて集められているので、出版業のほとんどが東京に集中している今日、往時の上方特に大阪出版界の盛況を物語るものとして貴重な資料といえる。